沖縄県立博物館紀要，第8号，9－36，1982

多和田真淳調査収集の考古資料(I)

多和田真淳★　知念　勇★★

はじめに

昭和7年～同13年に収集した考古資料は，今次大戦で失なってしまった。その中にはすでに破壊された具志川市天願貝塚や沖縄市仲宗根第2貝塚の遺物などがあった。今回紹介する資料は戦後に収集されたもので昭和48年12月に沖縄県立博物館に寄托した資料である。

県立博物館ではこれらの資料を整理して，昭和51年3月「特別展多和田真淳氏蔵考古資料展」を開催し，資料の一部を写真で紹介[注1]した。しかしそれは保管資料の一部であることや，実測図はなく，解説もないことなどから，研究資料としては充分活用できない状況にある。

本資料中には今日では得難たい貴重なものが多くあるため，正式な報告を望む声が多くあり，今回から紀要に紹介することにした。

同資料は第1表に示したように132遺跡で総点数1013点である。年1回の紀要に連載するだけでは長年を要することになるので，いずれ機会をみて，一括して報告したいと考えている。

いずれにしても今回の報告が長年未発表のままになっていた貴重な資料をまとめるきっかけになればさいわいである。

今回は　(1)沖縄市八重島貝塚　(2)勝連町平安名貝塚　(3)具志川村大原貝塚の資料について報告する。

第1表　多和田真淳調査収集考古資料一覧表

(県立博物館寄托資料)

No.	遺　跡　名	出　土　地	遺　　物	点数
1	伊波貝塚	石川市字伊波	土器・石器・貝製品・その他	97
2	八重島貝塚	沖縄市字八重島	土器・石器・骨製品・その他	65
3	百名貝塚	玉城村字百名	土器・石器・貝製品・その他	47
4	新原貝塚群	玉城村字新原	土器・貝製品・その他	14
5	久米島大原貝塚	具志川村字大原	土器・石器・その他	204
6	大山貝塚	宜野湾市字大山	土器・石器・貝製品・骨製品・その他	2056
7	平安名貝塚	勝連町字平安名	土器・石器・貝製品・骨製品・その他	337
8	屋那覇島遺跡	伊是名村字屋那覇島	土器・石器・貝製品	23
9	喜友名貝塚	宜野湾市字喜友名	土器・石器・その他	62
10	知花貝塚	沖縄市字知花	獣骨片	
11	宇佐浜（A）遺跡	国頭村字辺戸	土器・石器・その他	115

(★　たわだ　しんじゅん　那覇市史編集委員)
(★★　ちねん　いさむ　県立博物館学芸員)

No.	遺　跡　名	出　土　地	遺　物	
12	カヤウチバンタ貝塚	国頭村字宜名真	土器・石器・その他	168
13	与那嶺貝塚	今帰仁村字与那嶺	土器・石器	103
14	糸満市並里貝塚	糸満市字喜屋武	土器・石器・その他	179
15	仲田貝塚	伊是名村字仲田	土器・石器	13
16	牧港貝塚	浦添市字牧港	土器・石器・その他	366
17	運天（ブル溝）貝塚	今帰仁村字運天	土器・石器・その他	167
18	熱田貝塚	恩納村字熱田	土器・その他	131
19	仲尾次貝塚	今帰仁村字仲尾次	土器・その他	124
20	清水貝塚	具志川村字仲泊	土器・石器・その他	640
21	ウルル貝塚	〃　〃	土器・石器・その他	124
22	アカジャンガー貝塚	具志川市字金武湾	土器	13
23	アギギタラ貝塚	伊是名村字伊是名	土器・その他	30
24	具志原貝塚	伊江村字川平	土器・その他	80
25	野甫貝塚	伊平屋村字野甫	土器・その他	17
26	親畑貝塚	伊是名村具志川島	土器	23
27	宇堅貝塚（第２）	具志川市字宇堅	土器・石器	107
28	大浜貝塚	本部町字大浜	土器・その他	17
29	大あぶ洞隣り洞窟遺跡	勝連町字比嘉	土器	31
30	塩屋貝塚	恩納村字塩屋	土器・石器	61
31	川田原貝塚	糸満市字名城	土器・石器・その他	852
32	内花貝塚	伊是名村字内花	土器	73
33	東ガジナ原貝塚	伊平屋村字田名	土器	16
34	仲泊貝塚	恩納村字仲泊	土器・石器・その他	76
35	喜屋武貝塚	糸満市字喜屋武	土器・石器	27
36	渡嘉比久貝塚	渡嘉敷村字阿波連	土器・石器	23
37	ブシナ貝塚	恩納村字伊武部	土器	13
38	勢理客貝塚	伊是名村字勢理客	土器	73
39	久里原貝塚	伊平屋村字前泊	土器	99
40	東原貝塚	伊平屋村字田名	土器	22
41	伊是名貝塚	伊是名村字伊是名	土器	22
42	前川ガラガラ洞	玉城村字前川	土器	18
43	伊江島川平	伊江村字川平	土器	12
44	金武前の浜貝塚	金武町字金武	土器・その他	112
45	兼次古島貝塚	今帰仁村字兼次	土器・石器	152
46	アラダイバル貝塚		土器	15
47	アグンハミ貝塚	知念村字久高	土器	11
48	兼久原貝塚	本部町字崎本部	土器	6
49	浜比嘉竜の宮	勝連町字比嘉	土器	29
50	浜比嘉島	〃　〃	土器	11
51	浜比嘉天川洞穴	〃　〃	土器	9
52	浜比嘉三様洞	〃　〃	土器・須恵器	26

No.	遺　跡　名	出　土　地	遺　　物	点数
53	ガラビ濠貝塚	具志頭村字具志頭	土器・その他	261
54	ガラビ濠西側畑の中	〃　　〃	土器	4
55	十柱洞遺跡	具志頭村字新城	土器・その他	8
56	金武湯屋洞穴	金武町字金武	土器	3
57	チビチリガマ	読谷村字波平	土器	2
58	金武洞穴遺跡	金武町字金武	土器・その他	77
59	玉城前川下流洞穴	玉城村字前川	土器	15
60	新城洞穴遺跡	具志頭村字新城	土器・石器・その他	86
61	久高島後生山遺跡	知念村字久高島	土器・その他	38
62	新原貝塚群（後期）	玉城村字新原	土器	16
63	具志頭グスク	具志頭村字具志頭	土器	28
64	具志川グスク	具志川市字具志川	土器・陶磁器	59
65	フエンサグスク	糸満市字名城	土器・須恵器・その他	226
66	魚下原遺跡	那覇市字繁多川	土器・その他	28
67	伊波グスク	石川市字伊波	土器・陶磁器・その他	47
68	江洲グスク	具志川市字江洲	土器・須恵器・陶磁器	32
69	越来グスク	沖縄市字越来	土器・須恵器	39
70	沢岻グスク	浦添市字沢岻	土器・須恵器・陶磁器	31
71	棚原グスク	西原町字棚原	須恵器・陶磁器	15
72	阿波根グスク	糸満市字阿波根	土器・須恵器・陶磁器・瓦	34
73	大城グスク	大里村字大城	陶磁器	17
74	大里グスク	大里村字西原	須恵器・陶磁器	5
75	南山グスク	糸満市字大里	土器・須恵器・陶磁器	16
76	中城グスク	中城村・北中城村	土器	9
77	知花グスク	沖縄市字知花	土器・陶磁器	5
78	勝連グスク下貝塚	勝連町字南風原	土器・陶磁器	35
79	伊祖グスク	浦添市字伊祖	土器・須恵器・瓦・陶磁器	171
80	浦添グスク	浦添市字仲間	土器・須恵器・瓦・陶磁器	42
81	首里グスク	那覇市首里当之蔵町	土器・須恵器・瓦・陶磁器	224
82	恩納グスク	恩納村字恩納	土器・陶磁器	29
83	嘉手納グスク	嘉手納町字嘉手納	土器・須恵器・陶磁器	11
84	仲間第一貝塚	竹富町字大富	獣骨・魚骨・海産貝	多量
85	仲間第二貝塚	〃　　〃	石器・貝錘	3
86	仲間部落貝塚	〃　　〃	土器・その他	15
87	船浦貝塚	竹富町字船浦	土器・陶磁器・その他	21
88	船浦古島遺跡	〃　　〃	土器・陶磁器	3
89	フルスト原貝塚	石垣市字大浜	土器	3
90	野底貝塚	石垣市字野底	土器	4
91	平得仲本御嶽遺跡	石垣市字平得	土器・陶磁器	17
92	前原保里遺跡	竹富町黒島	土器・陶磁器	2
93	ナカモト南野遺跡	〃　　〃	土器・陶磁器	4

No.	遺　跡　名	出　土　地	遺　物	点数
94	上原貝塚	竹富町字上原	土器・石器・陶磁器	13
95	大原洞窟遺跡	竹富町字大富	自然遺物	少量
96	山原貝塚	石垣市字真栄里	陶磁器	19
97	ニラスク貝塚	石垣市字新川	土器	8
98	平西貝塚	竹富町字古見	土器・貝錘・陶磁器	31
99	西表ユツン向い遺跡	竹富町字高那	土器・陶磁器	5
100	大富新港川	竹富町字大富	土器・陶磁器	5
101	与那良遺跡	竹富町字与那良	土器・青磁	4
102	星野貝塚	石垣市字星野	土器・陶磁器	5
103	八重山農高西遺跡	石垣市字大川	土器・陶磁器	7
104	湾貝塚	奄美喜界島	土器	2
105	喜念貝塚	奄美・徳之島・伊仙村	土器	4
106	宇宿深道貝塚	奄美大島・笠利村	土器	41
107	面縄第一貝塚	奄美・徳之島・伊仙村	土器	20
108	面縄第二貝塚	〃　　〃	土器	18
109	久高ヤグル貝塚	知念村字久高	土器・石器	26
110	運天原サバヤ貝塚	名護市屋我地島運天原	土器・その他	45
111	野国貝塚	嘉手納町字野国	土器・石器・その他	311
112	久良波貝塚	恩納村字久良波	土器	8
113	トールガマ	金武町字漢名・漢名城下	土器・その他	96
114	高摩文仁	糸満市字摩文仁	土器・須恵器・陶磁器	22
115	伊計城	与那城村字伊計	土器・その他	69
116	大川グスク（屋良）	嘉手納町字屋良	土器	11
117	勝連中ノ嶽遺跡	勝連町字比嘉	土器・石器・その他	22
118	島尻貝塚（B）	伊平屋村字島尻	土器	12
119	具志堅・新里洞穴	本部町字具志堅	土器	46
120	浜比嘉大あぶ洞窟遺跡	勝連町字比嘉	土器	27
121	勢理客C貝塚	伊是名村字勢理客	土器・陶磁器・染付	73
122	久米島大原（北原貝塚）	具志川村字大原	土器	7
123	具志堅ウージ	知念村字具志堅	土器細片・獣骨片（鹿）	221
124	仏ン当貝塚	今帰仁村字与那嶺	土器	10
125	第二嵩下原貝塚	那覇市字嵩下原	土器	6
126	渡口洞窟遺跡	北中城村字渡口	土器・鉄滓？	7
127	御殿庭遺跡	知念村字久高	土器・須恵器・鉄滓？	11
128	アシチ原遺物散布地	伊平屋村字島尻	土器・青磁	3
129	本部野原洞窟遺跡	本部町字野原	獣骨片	40
130	グーサン森遺跡	伊平屋村字野甫	土器・陶磁器	29
131	長浜丘陵採集地	読谷村字長浜	土器・須恵器・陶磁器	24
132	親富祖貝塚	浦添市字仲西	土器・須恵器・陶磁器	22
	総　計（132件）			10131

第2表として，多和田[注2]と高宮廣衛氏[注4]の編年表を対照してかかげた。なお多和田の編年表は第1表にかかげた遺跡の資料と前述昭和7年～同13年の収集した資料が基準となった。

(一)八重島（ヤシマ）貝塚

発見1954年1月15日　多和田真淳

沖縄市字嘉真良俗称ヤシマガーという泉の東側上方崖下標高約70mに形成された貝塚で，中心部は畑地となっている。貝塚の範囲は約8m×15mで小規模である。貝塚の前面（西側）は比謝川上流の支流になる小川が流れており，北側は低湿地となっている。発見当時は遺物が豊富に散乱していたが現在は表面採集は困難な状況にある。本貝塚は発掘調査は行なわれていない。

今回紹介する遺物は土器と石器（石斧）である。

土　器

土器は細片をのぞくと第1図と第2図に示した合計27個である。第2図9～11の3片（小片のため形式不明）をのぞくとすべて荻堂式に属する。表面採集資料とはいえ荻堂式だけが単独に出土する遺跡はめずらしく，注目に値する。

これらの土器はすべて破片で復元して器形をうかがえるものはなく，器形による分類は不可能なため文様を中心に分類した。これらの土器は胎土に石英と石灰質砂粒を含むこのことは全体に共通することである。

分類可能な22片を次の6種に分類した。

第1種

本種は半截竹管状工具を用いて口縁部に平行する平行沈線文が3列あり，その下に同種の工具による沈線の鋸歯文が施され，さらにその下に平行沈線文と鋸歯文が配されている。

現存部でみると口縁部左端に波状の山形が一部認められる。

器厚約6㎜で表裏面とも赤褐色の土器である。

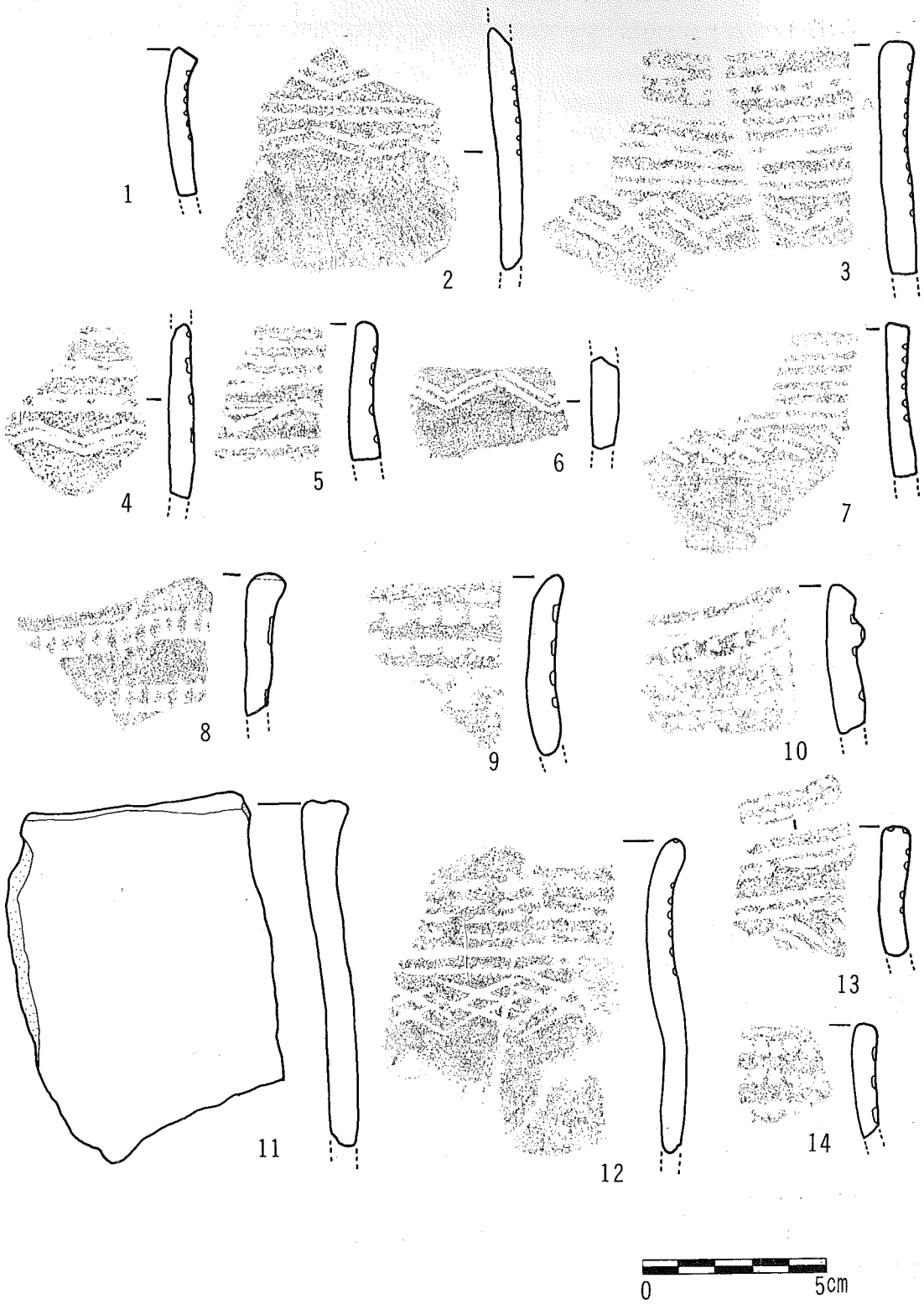
第1図2は口縁を欠く資料で頸部から胴部にかけての資料である。文様は半截竹管工具による平行沈線文の上下に鋸歯文が一列づつ施されている。

器厚6㎜で表裏面とも黒色である。

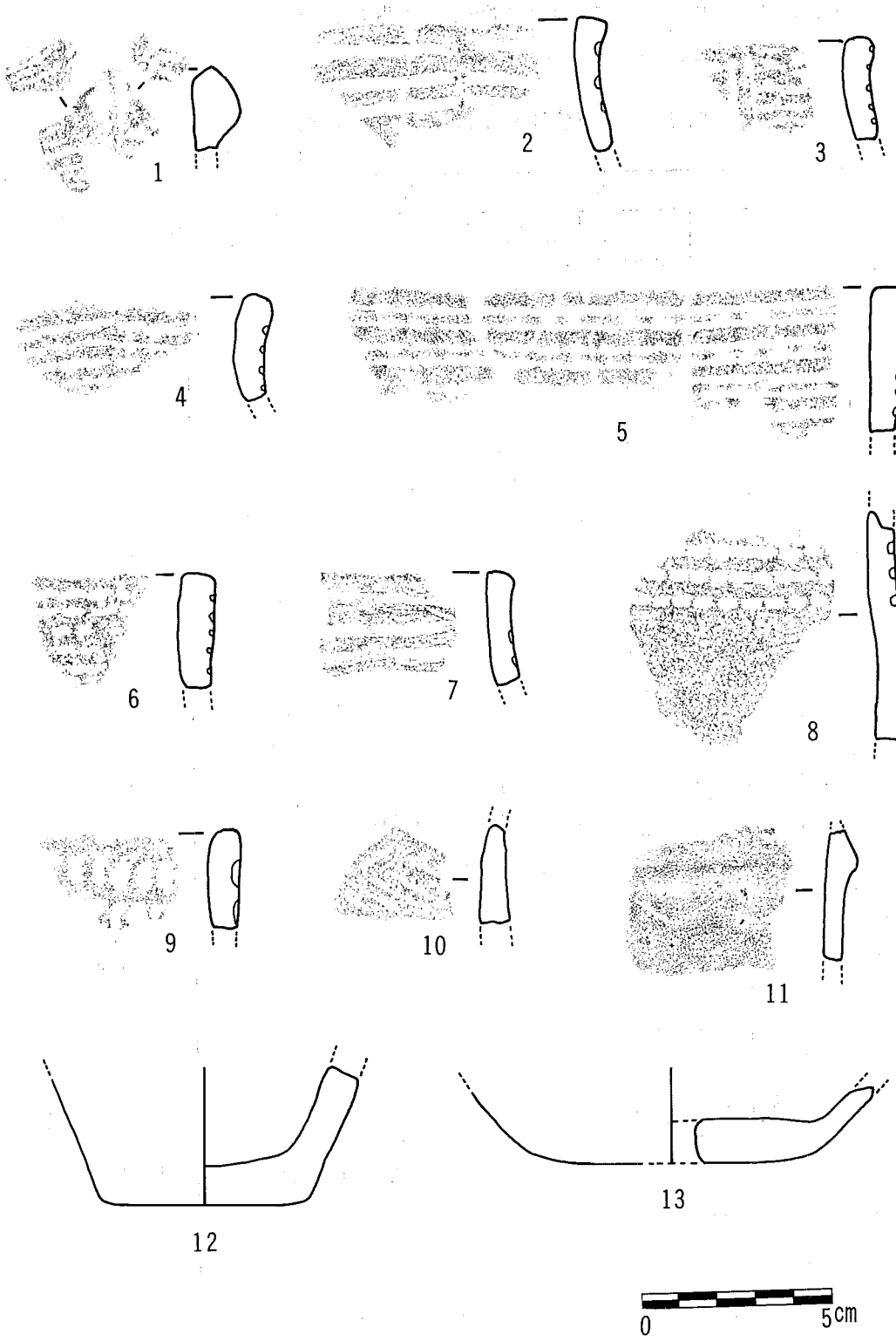
第1図3，第1図版3は半截竹管工具による平行押引文が4列施された下に同様工具による沈線の鋸歯文が一列施されている。

器厚7㎜で両面とも赤褐色を呈し，平口縁で口縁が外反し胴部にかけてふくらみをもつ深鉢形の土器である。弱くもろい。

第1図4は口縁部を欠く破片である。半截竹管状工具による押引文が3列施されその下に同様の鋸歯文が施されている。



第１図　八重島貝塚土器（荻堂式）



第２図　八重島貝塚土器（荻堂式）

器厚７㎜で両面とも赤褐色を呈する。

第１図６は口縁部を欠く胴部片で，半截竹管の沈線鋸歯文である。

器厚８㎜，両面とも黒色を呈する焼成のよわい土器である。

第２表　沖縄の土陶器・瓦出土年表（その一）

（年代は編年の目安を示したに過ぎない）

高宮編年		多和田編年						
					貝塚名	備考	沖縄に影響を与えた奄美の貝塚
前期	Ⅰ	天孫氏時代	琉球縄文前期	1,000	荻堂貝塚	ダイジョ（ヤマンム）・サトイモ（陸芋、チンヌク）の半栽培時代（手鉾文化圏）	
				900			
	Ⅱ			800		・半截竹管平行直線文平底カメ型土器	
				700			
	Ⅲ			600			
				500	浦添貝塚下層 大山貝塚最下層	市来式土器出土（新田重清） 市来式と伴出する流水爪形文土器出土（多和田真淳）	宇宿貝塚下層
				400	大山貝塚 熱田貝塚	BC1,408　80と発表（ミーヤン・高宮広衛） ・押型単直線平底カメ型土器	面縄第二貝塚
	Ⅳ		中期	300			
				200	城嶽貝塚 地荒原貝塚	（明刀銭出土） 馬の飼育始まる	
				100			
	Ⅴ			0	宇佐浜貝塚	定角片刃石斧出土 粟の栽培初まると推定 口縁斜三角丸底的尖底壺型土器	宇宿貝塚上層
				100	具志原貝塚下層	山之口式（弥生）土器出土（友寄英一郎・嵩元政秀）	
後期	Ⅰ	アマミキヨ時代	後期 上半	200	備瀬貝塚	山之口式土器出土（高宮広衛）	
				300	サバヤ貝塚 川田原貝塚 アカジャンガー貝塚	クビレ平底壺型土器 乳房状尖底カメ型土器	面縄第一貝塚
	Ⅱ			400			先島の貝塚
	Ⅲ		下半	500			（鉄文化圏） 仲間第一貝塚（西表島） 元名嘉貝塚（石垣島）　無土器
				600			
	Ⅳ			700			
				800	野国貝塚 具志頭城貝塚	開元通宝出土	下田原貝塚（波照間島） 仲間第二貝塚（西表島）　・外耳土器
	Ⅴ			900	フェンサ城貝塚	城跡系土器出土 面縄第一式土器の終末 琉球式須恵器出土 按司の発生 大麦・水稲・水芋（サトイモの一種）の栽培 牛の飼育初まる	平面貝塚　（西表島） 保良元島貝塚（宮古島） （青磁器出土） ニラ底貝塚（石垣島） 川平貝塚（石垣島）
				1,000	ヒニ城		
グスク時代		歴史時代	晩期	1,100			
			晩期	1,200		青磁器出土	

※両者の編年表は対比できない面もある。

第2種

本種は口縁部直下に三条の半截竹管工具による3列の平行沈線文または連点文下に綱代文，短沈線文が施されるもので第1図7・12・13の3個ある。

第1図7は3条の押引平行連点文の下に竹管状工具による刺突状文が長さ約1cmで沈線状に施されている。

口縁部がわずかに外反し，胴部が軽微な張をもつ深鉢形が想定される。

器厚7mmで器色は多少赤褐色をおびるが全体的には黒色である。

第1図12は口縁部直下に3列の平行連点文が横位に施されその下に綱代状文を施す。

口縁部左端部が山形の波状をなし，口縁部が外反し，胴部にふくらみをもつ深鉢形の土器である。

口唇部にも一条の連点文が施される。

器厚6mmで口径推定10.8cm口縁から頸部にかけては表裏面とも赤褐色でその下は黒色となる。

第1図13は口縁部が波状をなし波頂部付近で欠失したとみられる。

文様は口縁部直下の平行連点文は口縁部と平行に施され，その下の平行連点文は底部と平行する方向で施されている。その下に前述の同図7と同様の短沈線文が施されている。口唇部にも一条の連点文が施されている。

口縁部がわずかに外反し，胴部の張る器形が想定される。

器厚7mm，器色は表が褐色で裏が黒色となる。

第3種

同種は半截竹管状工具による連点文または点刻文を主とする土器で第2図1～6の6点がある。いずれも小片のため施文部下端の文様の展開は不明である。

同図1は口縁部が山形突起をなすもので，この部分が肥厚する。この山形頂部から縦に一列の平行連点文が施されこの文様によって横位の平行連点文が切断されている。この縦位の文様によって山形突起の肥厚部が分断される。

器厚6mm，口縁が外反し器色は赤褐色である。

同図3は平口縁であるが横位文を分断する連点文が一列施されている。口縁部の左側が上がり気味となっており波状口縁が想定される。

器厚7mm，口唇部が円く，外反する。器色は内面が赤褐色で外面は黒味をおびている。

同4図は口縁部右が波状となる。口縁下に2列の連点文がみとめられるが以下は欠失しており不明，口唇部にも平行連点文がかすかに認められる。

器厚6mm，口縁部が外反する。全体に黒色を呈する。

同図5は接合して頸部が長さ13cmまで復元されたがその下は欠失しており，平行連点文が4列まで認められるが以下の文様展開は不明となるものである。

平口縁で口縁部も外反せず直行となるものである。口径推算18cmで，器厚7mm，器色は内外面とも赤褐色となる。

同６図は口唇部から2.8cm，口縁部で3.2cmと小片である。

第４種

単篦工具による押引，横捺刻文のものを第４種とした。第１図５・８・９・10・11・第２図７・９の７個がある。

第１図５は口縁部が右上りとなっており，波状口縁となることが考えられる。口縁下に三本の押引文がありその下に鋸歯文が配されさらにその下に押引文が一条認められる。

器厚６㎜，口縁部は外反し器色は内面赤褐色外面褐色となる。

同図８は口縁部右端に波状部の頂点をもつ土器で口縁下に幅８㎜の広目の単篦工具による横捺刻文が２列施されている。

器厚７㎜，口縁は外反，器色は内面赤褐色で外面は褐色および黒色となる。

同図９は口縁が右上りとなるため波状口縁が想定される。口縁部下に４列の押捺刻文が施されている。

器厚８㎜，口縁部外反，器色は内外面とも赤褐色となる。

同図10は口縁が右上りとなり，右端部にその頂点があるとみられる。口縁部下約１cmのところに幅５㎜の凸帯文が口縁部と平行に施されている。凸帯文に添って上下に一本ずつ単篦工具による押引文とその下方に底部に平行する押引文が２本施されている。

口縁が外反し，器厚７㎜，器色は内面から口唇部にかけて赤褐色となり，外面は褐色となる。

同図13は口縁部が右上りとなるため波状口縁となることが考えられる。口縁部下に三本の横捺刻文が認められる。

器厚６㎜で口縁部がかるく外反する。内外面とも赤褐色を呈する。

第２図７は幅３㎜の単篦工具による浅い沈線文が３本施される。口縁部は外反，器厚６㎜，外面の下側が褐色となるが他はすべて赤褐色となる。

第２図８は口縁部を欠く頸部から胴部にかけての資料で上部に３本の横位の点刻文がある。

口縁口が外反し，胴部のふくらみをもつ器形で頸部から胴部へ移行するところでく字形になる。

器厚７㎜，内面は褐色で外面が黒色となる。

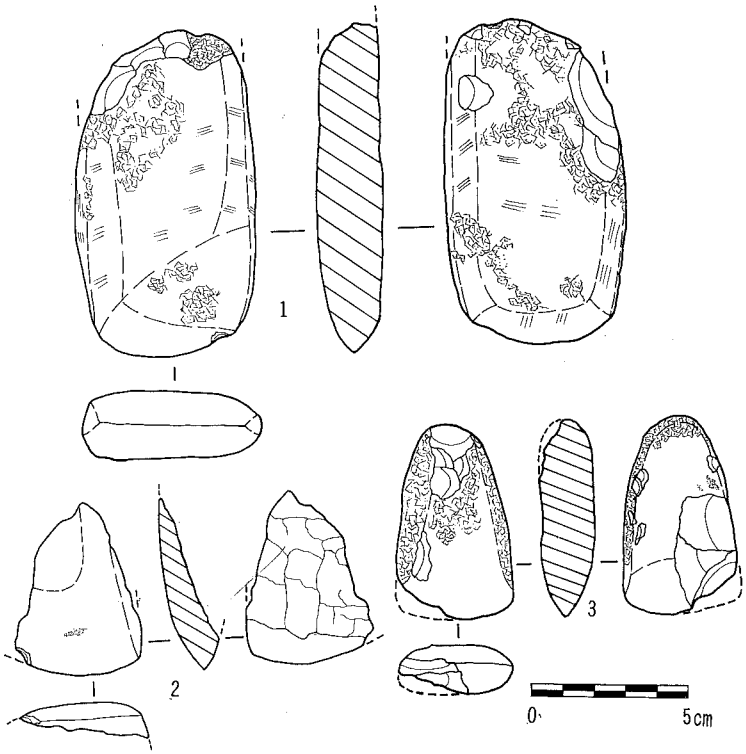
同図９は口縁部下に横位の爪形文が２列みられる。口縁部右側が幾分上り気味となっているため波状をなすことが想定される。

器厚８㎜，器色は内外両面とも赤褐色となる。

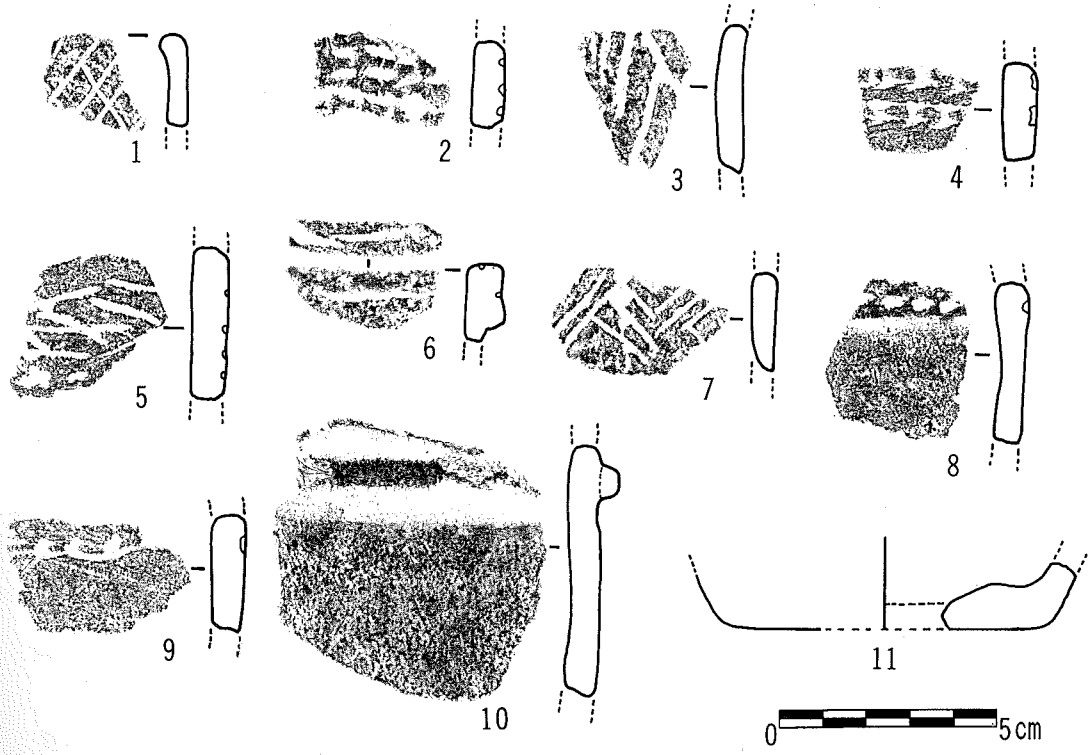
第５種

第１図11の無文土器を第５種とした。平口縁で外面に器面調整の痕が残されている。

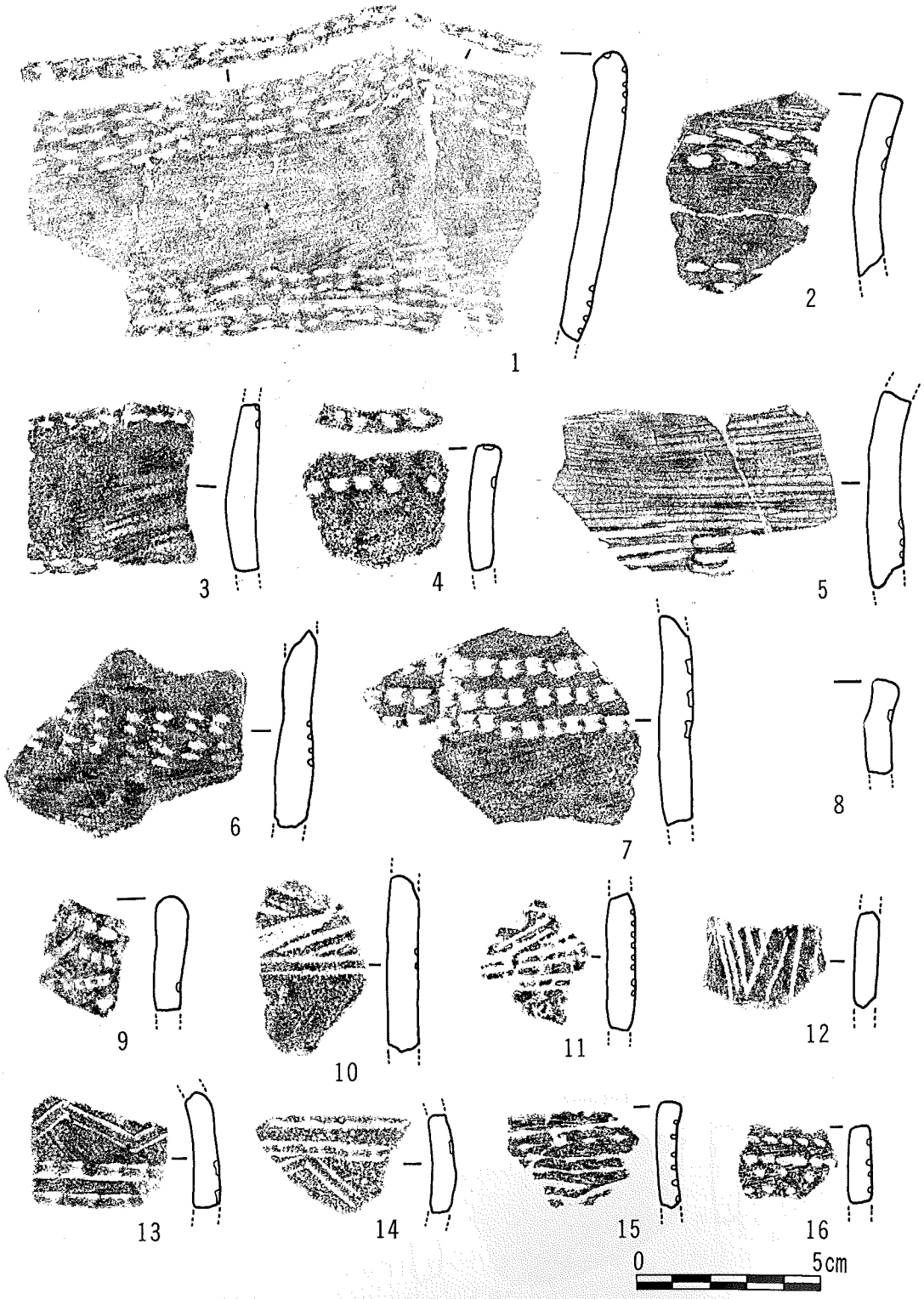
器厚７㎜，器色は外面下部が黒色となる外はすべて，赤褐色を呈する。口縁部がわずかに外反するが胴部は張りの少ないタイプの深鉢形の土器である。



第3図　八重島貝塚　石器（石斧）



第4図　平安名貝塚　土器



第5図　平安名貝塚　土器 { 1～7 伊波式
8～15荻堂式

その他

その他第２図10の綾杉状沈線文が施される。同図11は無文で上部が段状となり断面がカヤウチバンタ式に類似するが胎土，器色は荻堂式に類似する。

底部は第２図12，13の２個ある。同12は胴部への立上りが急であるが同図13は胴部への移行部はゆるやかである。

同図12は器厚９㎜，底径5.5cm内外面とも褐色となる。同13は器厚1.2cm，底径7.4cm内外面とも赤褐色を呈する。

石　器

第３図１はほぼ長方形をなし，図面下端部の左側が一部欠失するほかはほぼ完形の磨製両刃石斧である。両側縁は角がついており刃部から約１cmの箇所で陵線が縦軸方向に通っている。長軸最大長10.3cm，最大幅5.7cm，厚さ2.0cm，重量230g，石質斑レイ岩製。

同図３は発形の小型石斧で両刃である。図の右側が自然面のままで他は研磨が施されている。刃部右側が欠失するが幅が約４cm刃部が最も幅が広い。刃部は円くなる。最大長6.2cm，厚さ1.1cm，重量60g，石質斑レイ岩製。

第３図２は刃縁から5.2cmのところで欠失する石斧で刃部の右側を欠く，最大長5.6cm，重量28gで輝緑岩製，現存部から推察して小型の石斧である。

貝製品

第６図７はシャコ貝を素材とするもので，幅1.7cm長さ約7cmであるが図の左端部が欠失する。左右両端に径８㎜の円形の穴が両面から穿ってある。この穴は両面から工具をまわしながら穿ったために穴の周辺部に研磨痕が残っている。

用途は垂飾かまたは，同様の製品を２個組み合せると腕輪としても使用が可能である。

小結

口縁部18点のうち山形の波状口縁をなすものが15点である。また口縁部が外反し胴部にふくらみをもつ器形も15点ある。その他胎土，文様構成，器色等からみて，土器はすべて荻堂式とみられる。

文様構成及器形等からみて，八重島貝塚採集の土器は荻堂式では中期から終末期にまたがる時期のものと考えられる。つまり大山式への移行期直前までのと考える。

石器は多和田が指摘[注3]しているように小形石斧が特徴的である。

㈡平安名貝塚

発見1955年10月27日　多和田真淳

勝連半島のつけ根近くにある勝連城跡の南側約300mの地点，標高約20mの段丘中腹に立地する。

同貝塚から中城湾までは直線で約200mの至近の距離にある。

多和田はここから発見された櫛目類似手法の文様をもつ土器を平安名式と[注3]名づけた。本貝塚も正式な発掘調査は実施されていない。

本貝塚採集の遺物は土器，石器，骨製品，貝製品がある。

土器は細片の胴部破片をのぞくと，第５図の16個と第４図の11個合計27個である。そのうち型式名の確定し得るのは伊波式と荻堂式である。

伊波式土器

第５図１～７の７個である。伊波式は高宮氏[注4]が述べているように，深鉢形，平底。口縁部は波状口縁をもち，口径は一般に胴径より大きく，朝顔形の外反。石英，チャートなどを含む。文様は口頸部に集中し胴部は無文となる。文様は上・中・下の三段に分けられる。上段と下段には同一文様(点刻文，連点文，短沈線文など）を配することが多く，また両者の間隔も荻堂式と比べると広くなる傾向がある。中段は無文となるのが多くなるが，施文がある場合は綾杉状文が多い。

平安名貝塚採集の伊波式土器はいずれも中段が無文となるものである。

上段と下段の文様が叉状工具による平行点刻文（第５図１・２・３・４・５・６と単篦工具による横捺刻文第５図４・７に分けられる。

同図１は波状口縁で波頂部においてコーナーをつくるため口縁部の平面形が方形となる。口径約22cmの大形の器形である。

文様は上段が口縁部と平行に平行連点文が２列施され下段も同様の連点文が底部と平行に２列施されている。

器厚８㎜，口縁部が大きく外反する。胎土には石英，チャート，石灰質石粒が含まれている。内外面に器面調整の擦痕が認められる。

器色の内面は褐色で外面は黒色となる。

同図２は叉状工具による連点平行文が上段に１列，下段に１列認められるが上段の文様は下段に比して施文具の幅が広いため上段と下段では施文具が異なると考えられる。

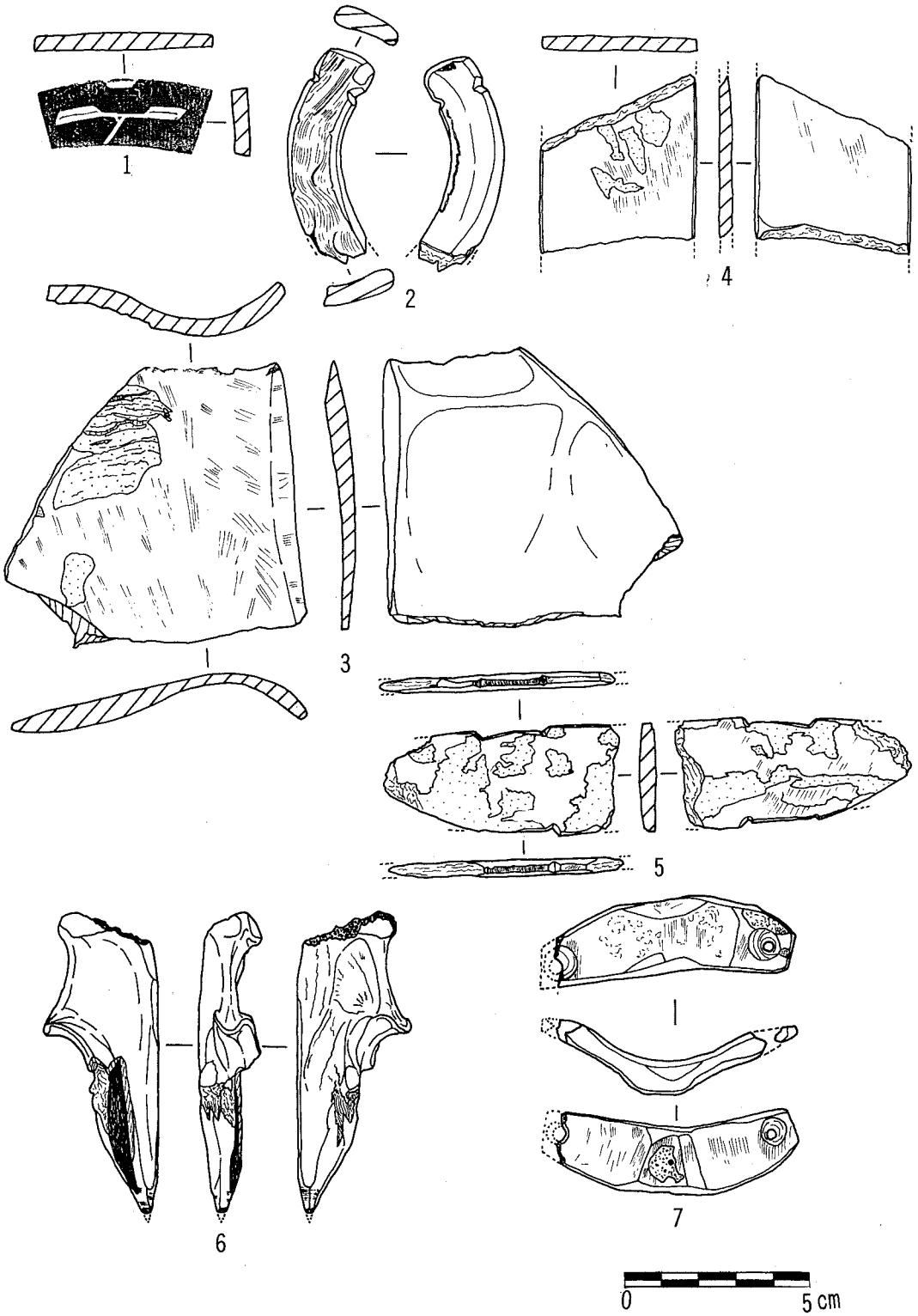
口縁部が波状をなし，内外面に器面調整の擦痕が認められる。器厚７㎜，器色は内面黒色で外面が褐色となる。口縁部が外反し，胎土には石英，石灰岩質砂粒が混入する。

第５図は単篦工具による横捺点刻文が一本と口唇部に一本施文されており器厚が５㎜と薄手となる土器である。伊波式に含めるべきかまよったが口縁部外反の角度と胎土に英石，チャート片，石灰質砂粒が混入し器色が内面赤褐色外面黒色となることなの特徴から伊波式に含めた。

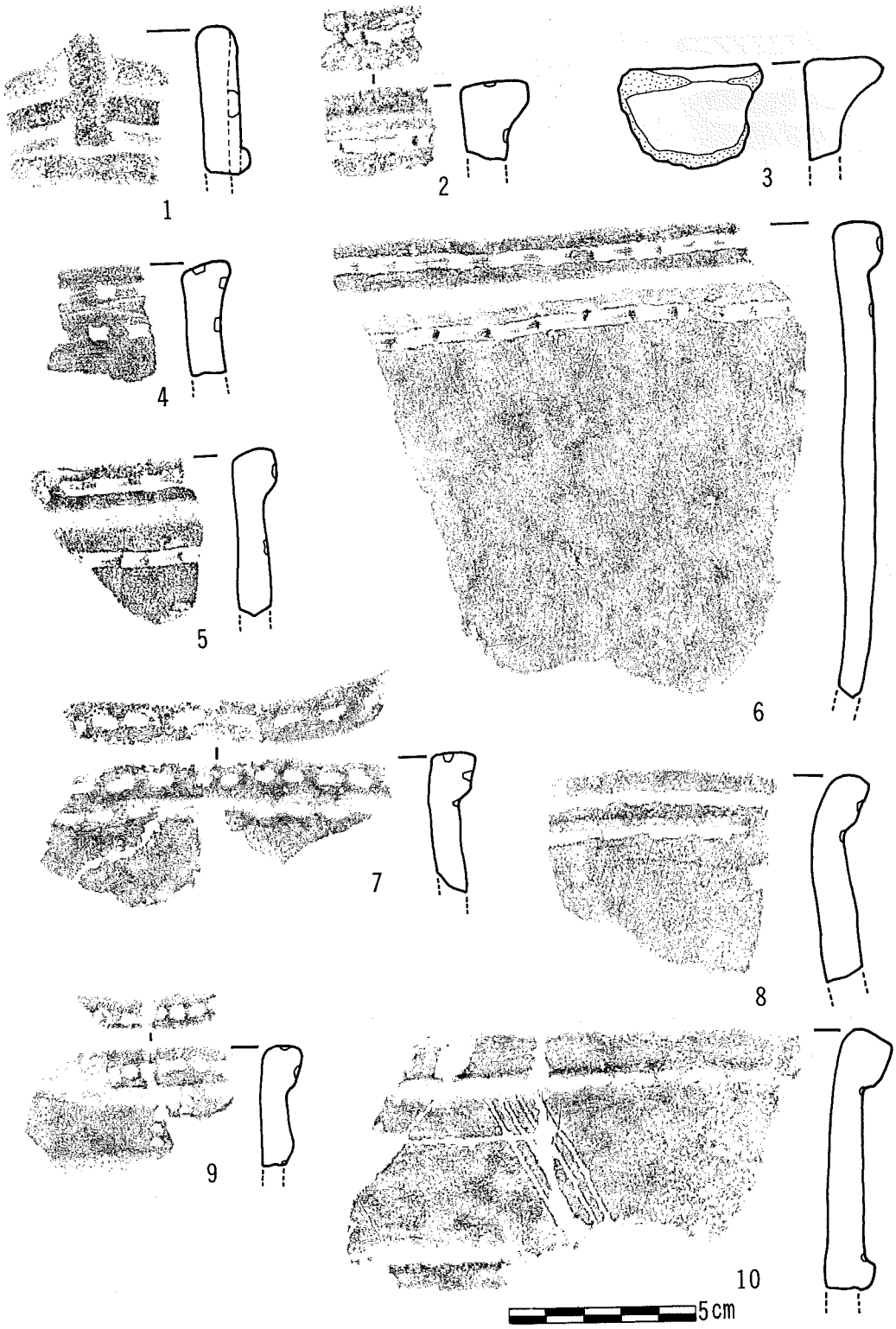
荻堂式

荻堂式は第５図９～15の７個である。すべて小片のため器形についてはわからない。

押引文に鋸歯状文の組合さるもの第５図９・13・14と綾杉状文となるもの同図10・11・12と二条連点平行文同図15・16の３種に分類できる。



第6図　平安名貝塚（7は八重島貝塚）
1・2・3・7　貝製品
4・5　石製品
6　骨製品



第７図　大原貝塚土器

その他の土器

第４図１は綱代状文の土器口縁部で，器厚５㎜の薄手土器で小形の器形が想定される。器色は内外面とも赤褐色となる。

同図２の平行連点文，同図３の斜沈線文，同図４の単篦工具による横捺点刻文，同図５の平行短沈線文，同図６の凸帯文，同図７の綾杉状文，同図８・９の平行連点文はいずれも小片のため形式が明確には決定したいが胎土，文様，器色，器形等から荻堂式に近いものと認める。

同図10は凸帯が現存部の上端に一条施されている外は無文である。

底部は第４図11が１個ある。胴部への立上り部がゆるやかである。底面はたんねんに器面調整が行なわれているが内面は雑な調整で凹凸となる。器厚10㎜，器色は内面赤褐色で外面は褐色となるが部分的に黒色である。

石　器

第６図版8・9，第６図4・5がある。第６図版8は卵形をした全面磨製で小形の用途不明の石器である。長軸下に打痕が残されている。長さ６cm幅3.8cm厚3.8cm重量100ｇである。石質は琉球石灰岩であるが風化しているため黄味をおびている.

第6図版9はほぼ楕円形で凹面以外は研磨が施されている長軸の上端と下端に打痕が認められること等から，磨石と敲石として使用されたとみられる。長さ10.3cm幅6.2cm厚さ1.8cm重量260ｇ。琉球石灰岩製。

第６図４は砂岩製の偏平な石器片である両側面が平行に幅４cmで加工されているが上下とも欠失するため全体形はうかがえない。

両面ともよく研磨が施されており，研磨痕らしきものが両面に認められる。重量13ｇ。

第6図5は現存部でみると梵鐘形となるが長軸の一端が欠失するため全体形は窺えない。

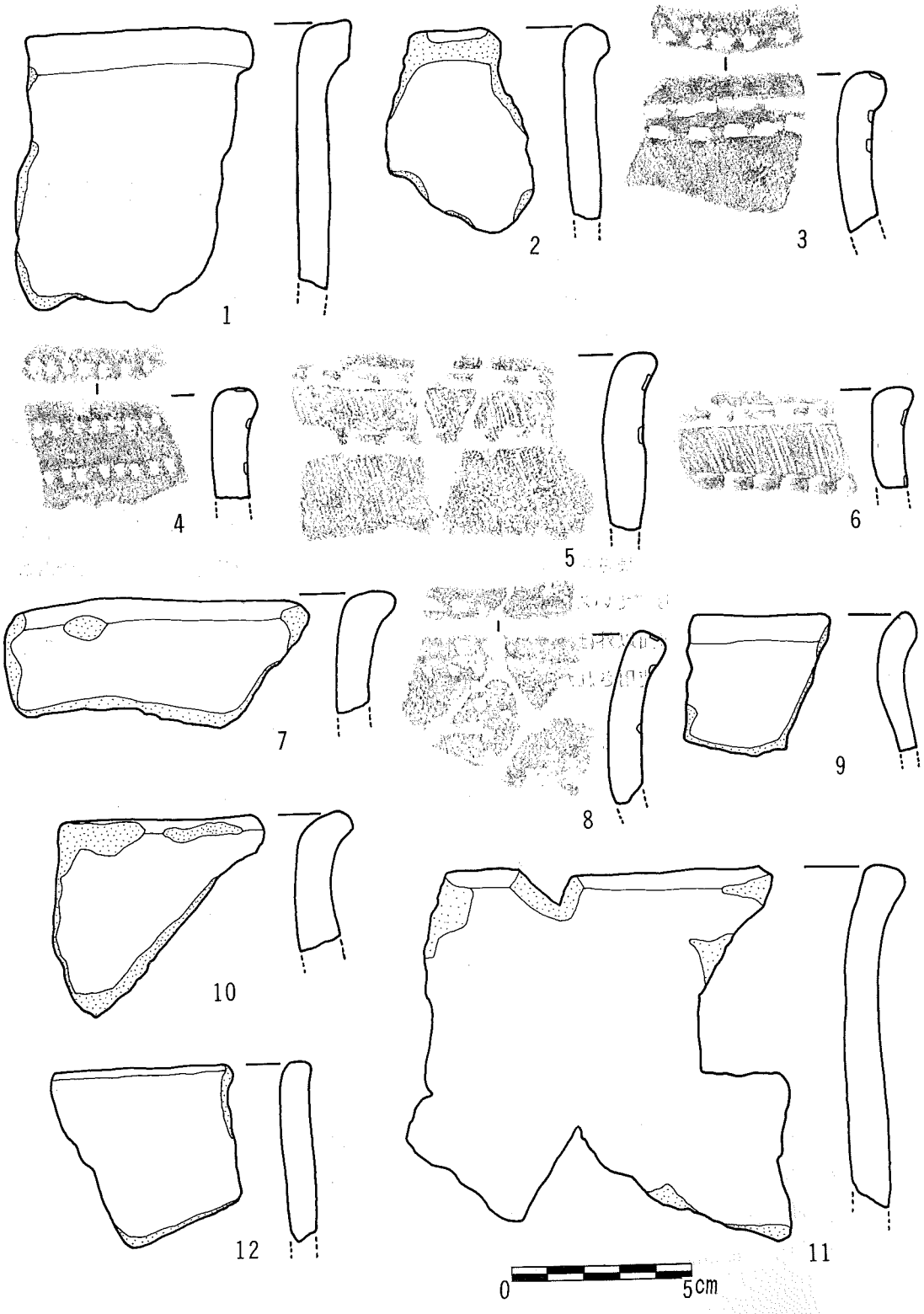
両側縁部に対象して２cm幅で切込みが入れられている。長軸の一端は欠失し他端は砲弾状となる。

砂岩製の偏平で両面に研磨痕が認められる。

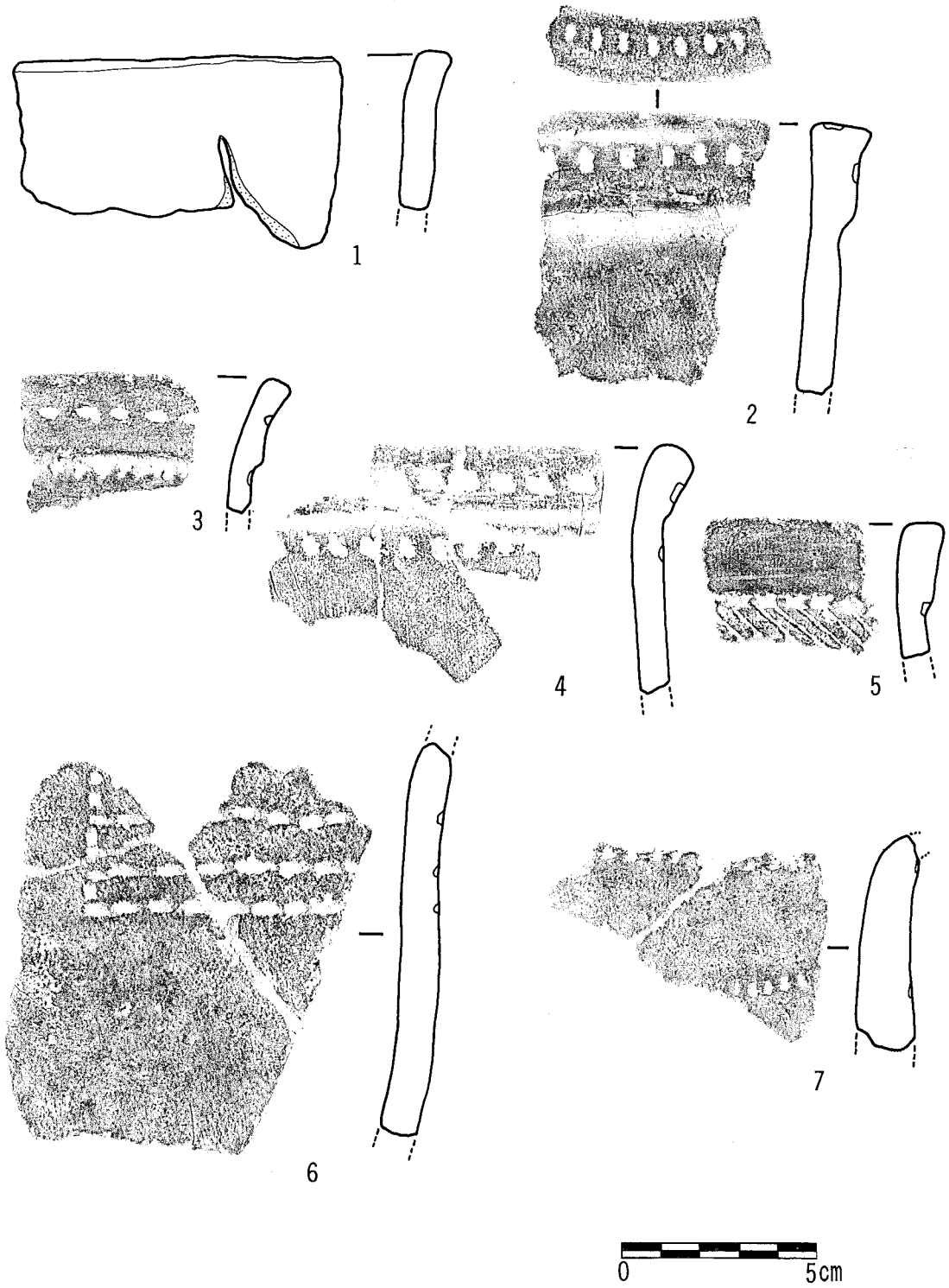
長軸長さ９cm，最大幅2.8cm，重量15ｇ。

貝製品

第６図２第６図版３でシャコ貝の口縁近くを幅1.8cmで長方形に切断し，長方形に成形している。長軸の一端が欠失し図の上端から0.9cmのところを側縁に刻を入れてある。厚さ3.5㎜，幅1.8cm，重量10.5ｇ。品と考えられる。



第8図　大原貝塚　土器



第９図　大原貝塚　土器

骨製品

第６図６はイノシシ右側尺骨を用いて作成された骨錐である。全面一様に褐色となっており火等で強化されたことが考えられる。

先端部が潰されており，先から約１cm余まで使用痕が認められる。錐としてまわしながら使用されたことが考えられる。

最大長約８cm，17.5ｇである。

小結

本遺跡採集の土器は明確に識別できるのは伊波式と荻堂式がある。土器は最も新しくみても大山期までと考えられる。

したがって，これと同時に採集されている石器や貝製品及骨製品等は伊波式から大山式時期に出土する[注7]例が多く知られており，今回紹介した貝製品及骨製品も荻堂式から大山式の時期相当とみられる。

㈢大原貝塚

発見　1955年６月16日　多和田真淳

大原貝塚は久米島南西海岸の大原砂丘に立地する貝塚である。同貝塚から北原の久米島飛行場に至る海岸添の砂丘地には，大原第１，第２，第３貝塚，北原第１，第２貝塚など前期～後期の遺跡が連続して続いている。

この砂丘地が久米島で最も遺跡の集中する地域である。大原貝塚は現在県の史跡に指定されている。

昭和54年５月から７月にかけて，土地改良事業に伴う緊急発掘調査が県教育庁文化課によって実施された。

同報告書[注8]によると史跡指定の地区は伊波式，荻堂式が出土し，発掘地区Ａ地点はカヤウチバンタ式，宇佐浜式が出土する。また第２貝塚からは後期の土器が出土している。このほか人骨，住居址等も発見されている。

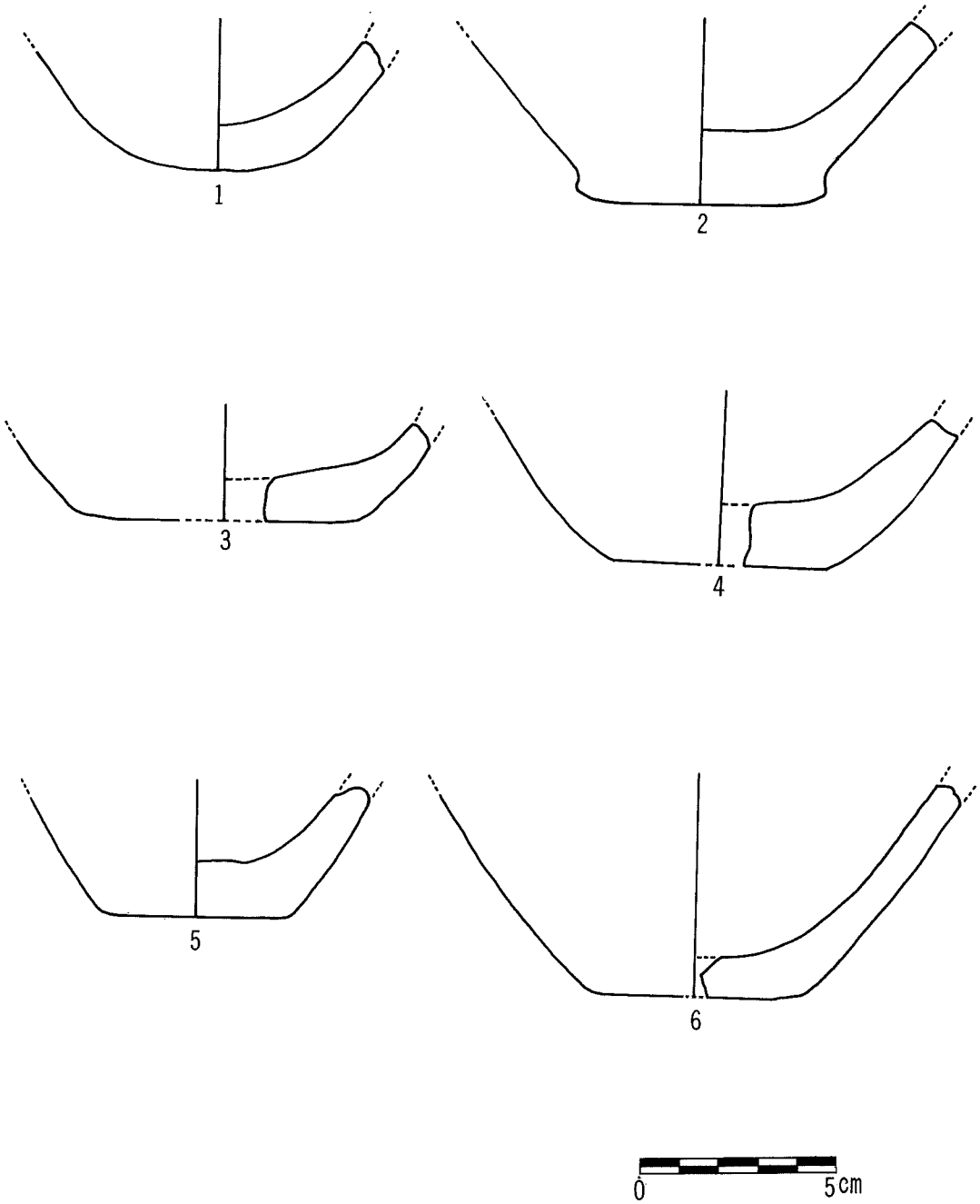
今回紹介する大原貝塚の遺物は土器のみである。

土　器

第８図と第９図掲載の土器はすべて室川式とみられるものである。

文様は単篦工具による横捺押引文と点刻文である。

口縁部が肥厚し外側へ突出し，口唇部が広くなるタイプ，第９図２・３・４の３個である。いずれも胎土には貝及び片石灰岩砂粒を混入することなど室川式の特徴を有している。



第10図　大原貝塚　土器（底部）

口縁の肥厚部が方形状になり肥厚部と口唇部に横捺文が一条とその直下に一条施される。第７図５・６・７・８・９は口縁肥厚部とその直下に一条づつの連点文が施される。同図10のように肥口部直下に一条とここから約4.5cmの箇所に凸帯文がまわされその間に４本組になった斜沈線文が施されている。

同図１は山形の波状口縁となり波頂部の直下から幅約８mmの凸帯文が縦とそれと交差するかたちで横に施され十字状となる。

器厚は８～10mmで伊波式や荻堂式に比して厚手であり，同図１以外は平口縁である。器色は褐色または黄褐色で焼成もよい。

第９図２・３・４・５はカヤウチバンタ式と認められるものであるが，文様，胎土，焼成及器形などの特徴からは，室川式に類似する。

同図１は口縁が肥厚せず外反する無文の土器である。胎土および焼成からして，室川式の時期に含めるべき土器かと考えられる。

同図５は口縁肥厚部の直下に横捺点刻文が施され頸部には斜状の細沈線文が施されている。

同図６は口縁部を欠く胴部の破片である。単篦工具による連点文がヒ状に施されている。

同図７は現存部上端と下端に点刻文が一本づつ認められる。器厚は最大1.5cmにもなる厚ぼったい土器である。

底部は第10図１～６の６個ある。同１は円底，器厚1.2 胎土には石灰岩砂粒及貝殻片が混入されている。ている。

同図２は前述１の円底をおしつぶして平底としたようなもので，胴部への立上り部分がくびれている。立上りの角度もゆるやかであり，胴部でふくらみをもつ器形が想定される。

器厚1.8cmの厚底，直径6.5cm胎土には石英，貝殻片等が混入する。室川式の底部かとみられる。

同図３～６はほぼ円形の平底，同3は底径7cm，器厚1.1cm，同4は底径5.5cm，器厚1.4cm，同５は底径4.8cm，器厚1.4cm同６は底径5.4cm，器厚1.1cmとなっている。

まとめ

大原貝塚採集の土器には宇佐浜式がなく，大山式もみられない。このことはカヤウチバンタ式の終末から大山式の間の時期で室川式の盛行する時期とみられる。

沖縄県教育委員会の発掘調査によると，伊波式から後期までまたがっており，地点により時期差のあることが知られているため，今回紹介した土器はほぼ同時期に集中してることから考えると採集範囲はかぎられてくる。

最後に今回報告した遺物の実測は，島袋洋，大城剛氏が行ない，石器の同定は当館大城逸朗主任学芸員にお願いした。末尾ながら感謝申し上げる。

注１，「特別展多和田真淳氏所蔵考古資料」沖縄県立博物館，昭和51年３月

注２，多和田真淳「琉球陶器の分類学的考察」考古学ジャーナル1972年

注３，多和田真淳「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」琉球政府文化財要覧，1956年

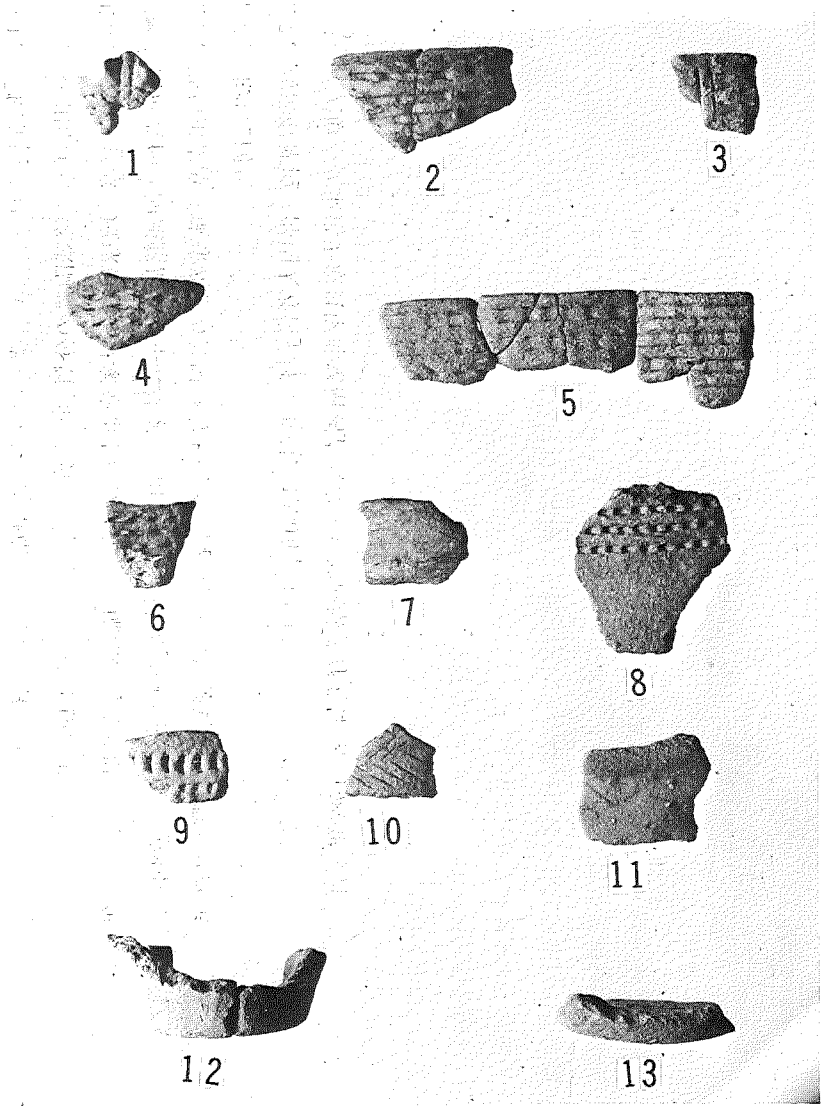
注４，高宮廣衛「沖縄諸島の編年（試案）」南島考古６号，沖縄考古学会，1978年12月

注５，多和田真淳「琉球列島の貝塚分布と編年の概年」琉球政府文化財要覧，1956年

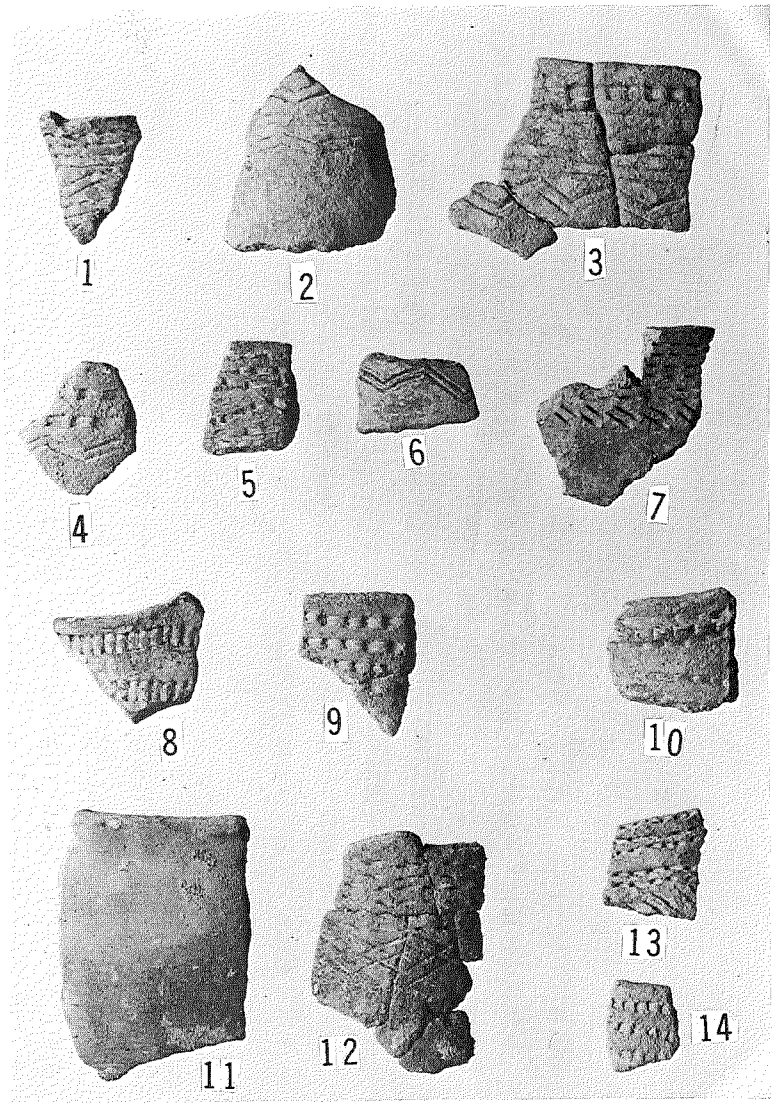
注６，注３に同じ

注７，高宮廣衛他「沖国大考古」４・５号，1980年，1981年

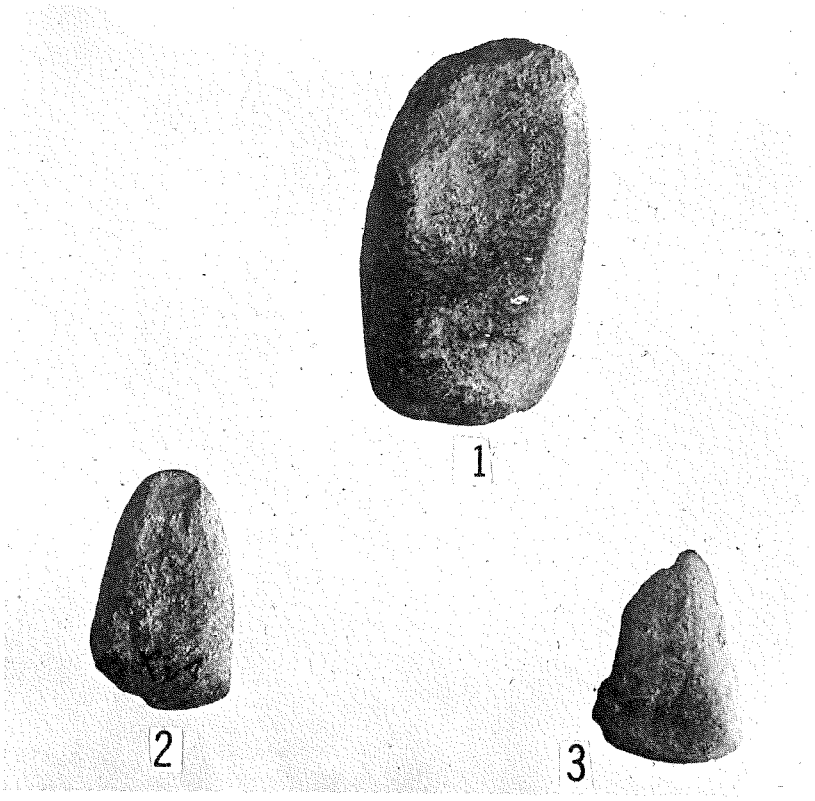
注８，「大原―久米島大原貝塚群発掘調査報告―」沖縄県教育委員会，1980年３月



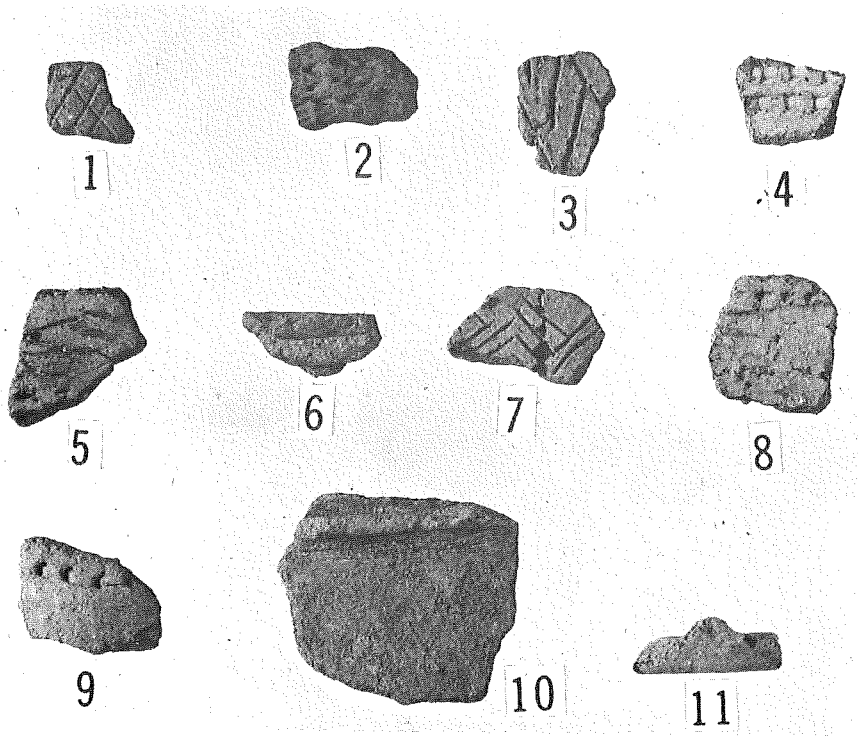
第2図版　八重島貝塚土器



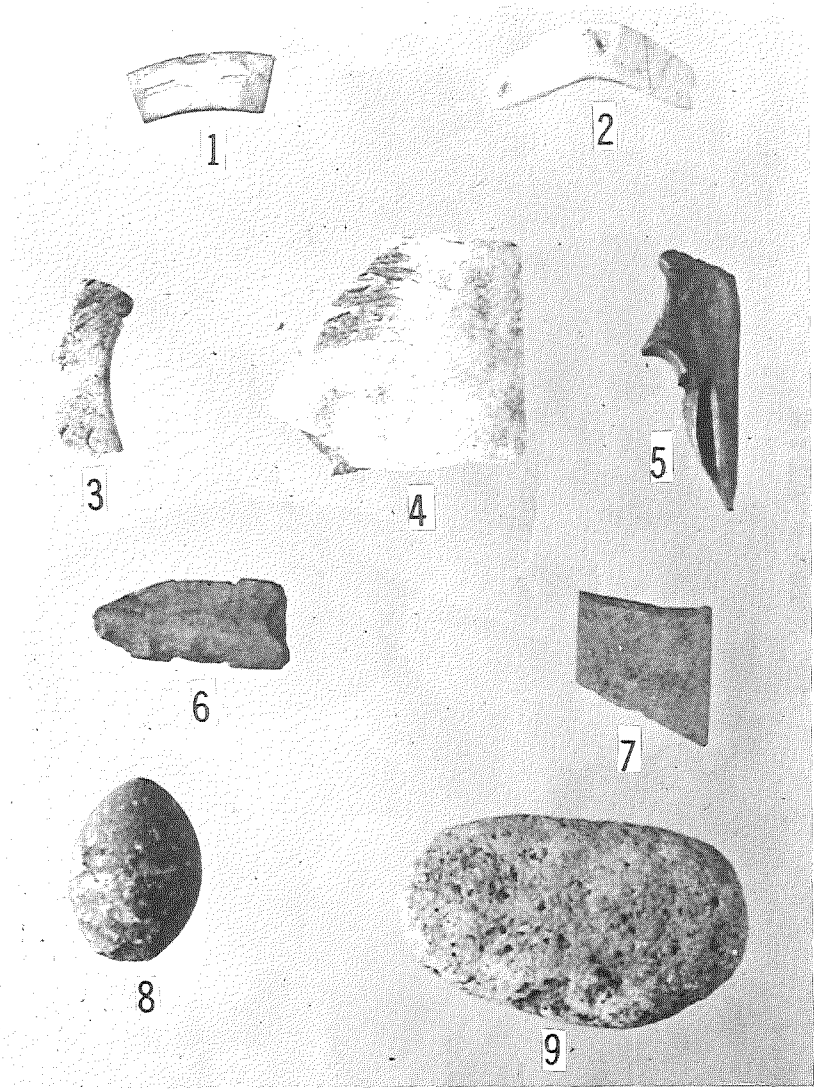
第1図版　八重島貝塚土器



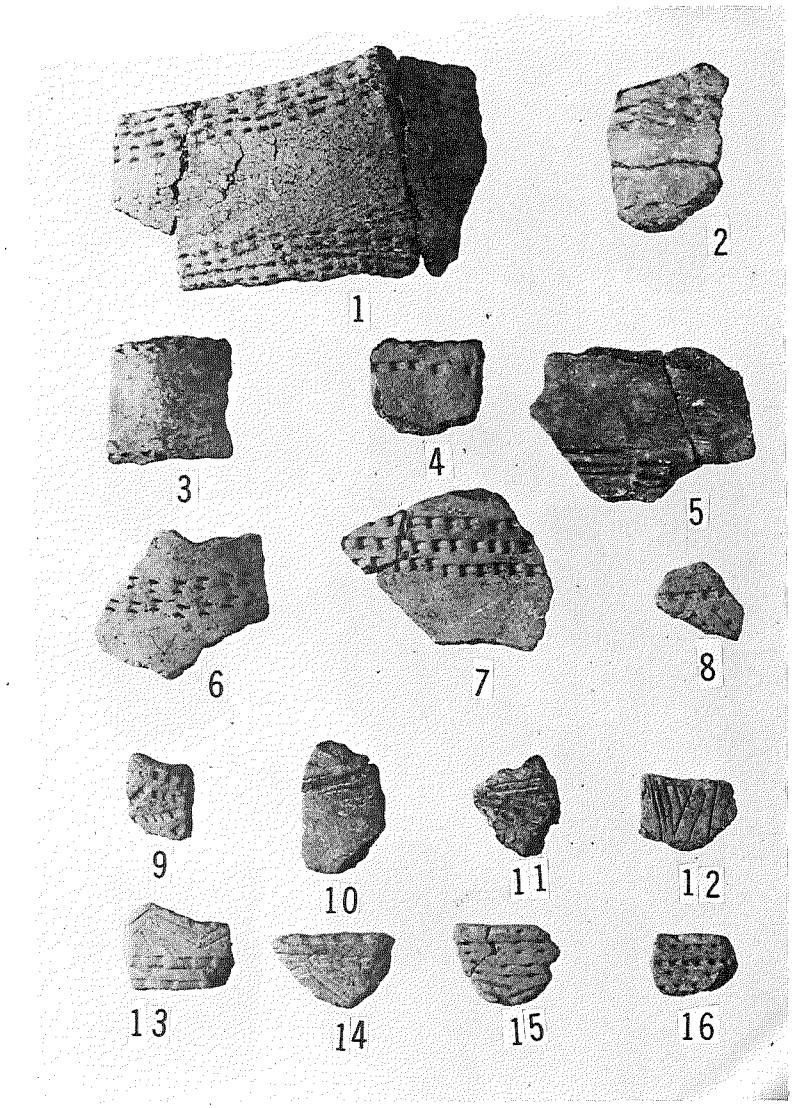
第3図版　平安名貝塚　石器



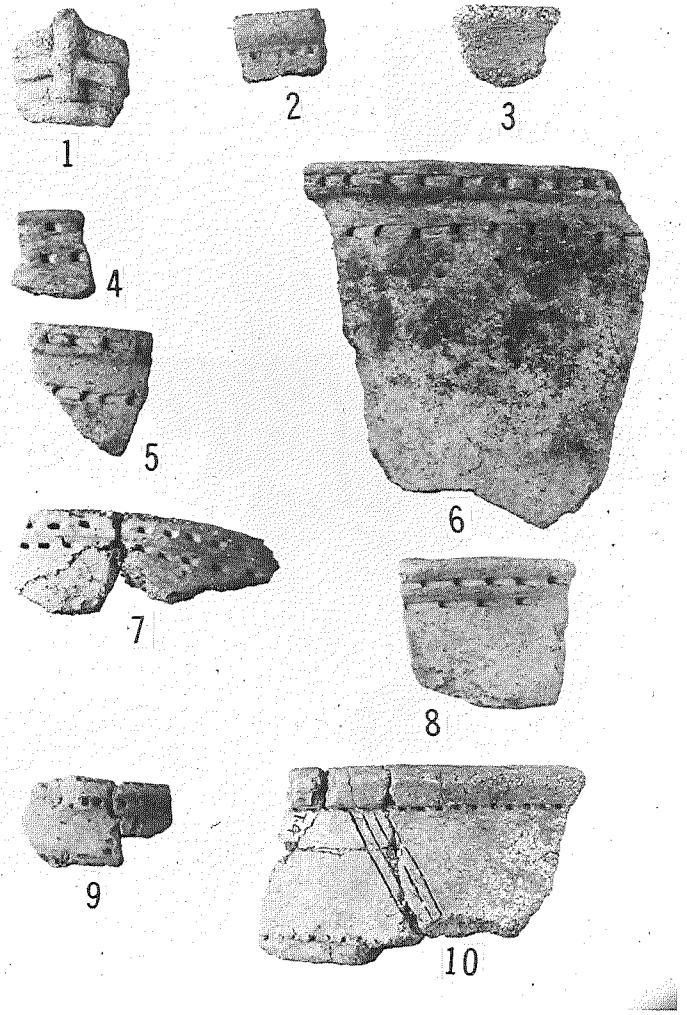
第4図版　平安名貝塚　土器



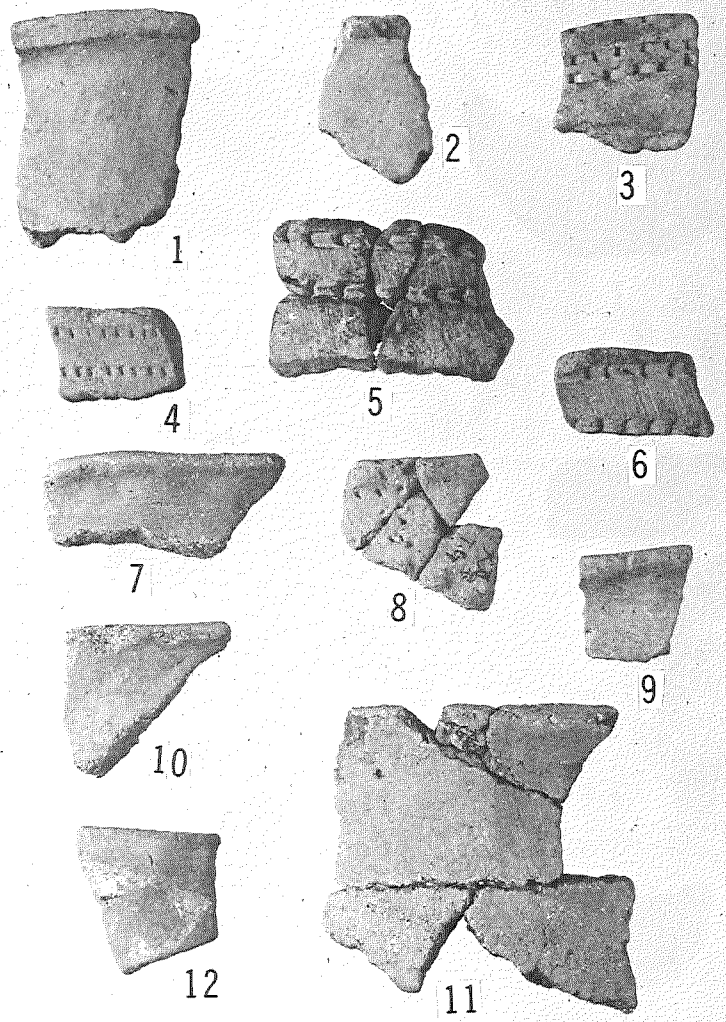
第6図版　平安名貝塚　貝製品・石製品・骨製品
2は八重島貝塚



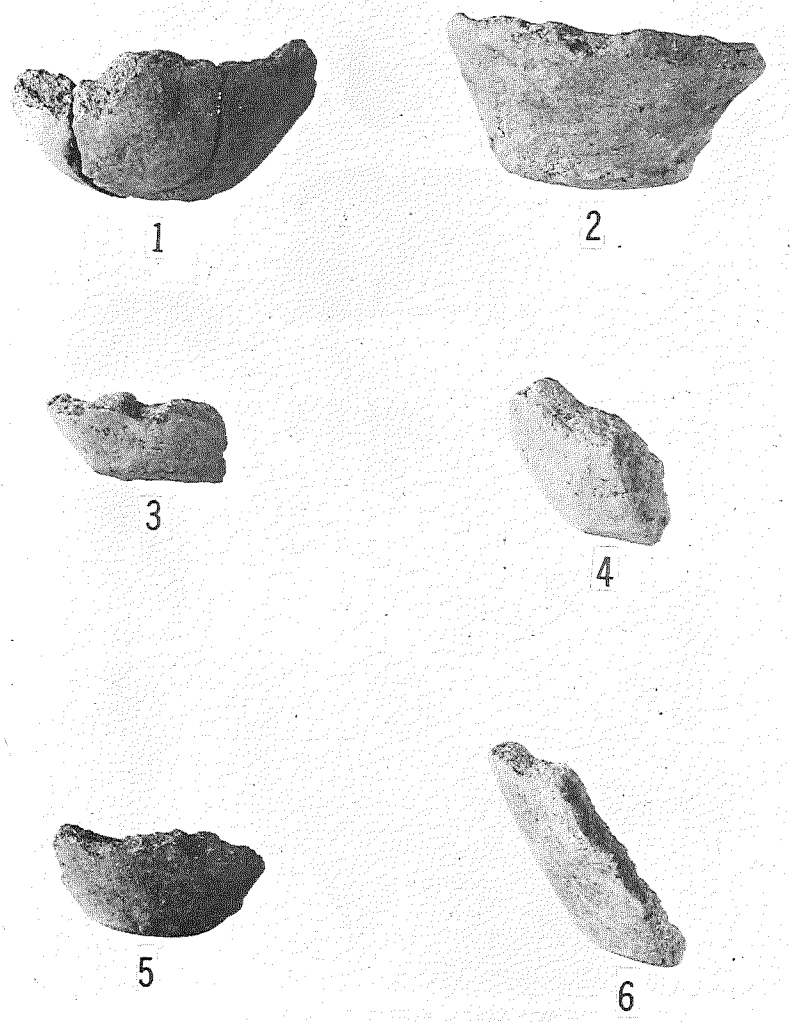
第5図　平安名貝塚　土器



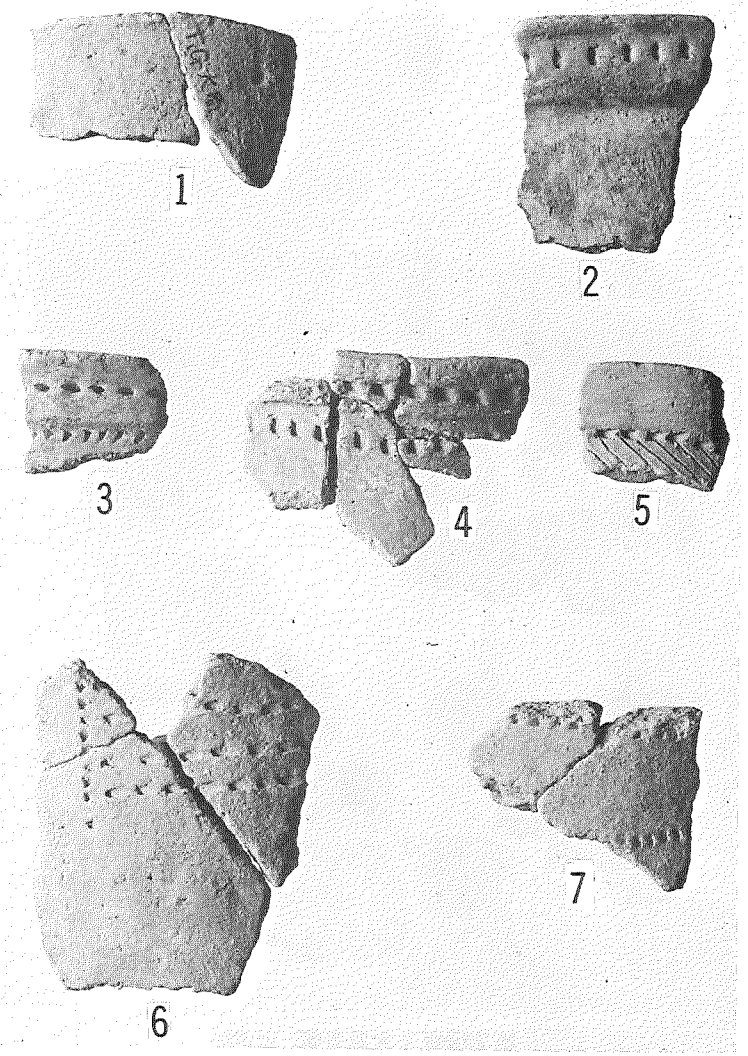
第7図版　大原貝塚　土器



第8図版　大原貝塚　土器



第10図　大原貝塚　土器（底部）



第９図版　平安名貝塚　土器